

「出雲流庭園は回遊してもよい庭か？」

「庭園文化研究分科会」

武田 隆 司

1. はじめに

平成30年から始まった出雲文化伝承館での「出雲流庭園文化講座」では、座学とともに庭を回遊するガイドンスも行っている。今年度も2回で50名以上の参加者があり、「出雲流庭園」への興味の高まりも見られる。特に普段は座敷からしか観賞できない庭に降り、飛び石に沿って回遊していくガイドンスは人気である。一般に出雲流庭園は「書院観賞式」の庭であり、座敷から観賞する庭であるとされるが、玄関の横の中門から書院まで飛び石が配置されており、茶庭的な動線も設定されているようにも見える。また平成28年度のレポートで触れた出雲流庭園の基となった「本陣庭園」では、殿様が歩いたとも伝えられている。現在の出雲平野の一般的な出雲流庭園では、普段は中門から庭経由で建物に入ることはなく、ハレの時、すなわち葬儀の際の住職、婚礼の際の花嫁などが入るぐらいのようである。出雲流庭園の飛び石の動線と建物の関係は平成30年に宇野技術士が同講座で述べている。いずれにしてもガイドンスでは飛び石から見える庭の眺めや様々な事物に対する参加者の興味は尽きないようであり、回遊式の庭としての活用も考えられるのではないか。

そこで今回は庭の回遊の動線となる「飛び石」に注目して、考察する。

出雲流庭園講座の様子（令和元年6月）



出雲流庭園ガイドンスの様子



2. 飛び石の歴史、目的

出雲流庭園において飛び石は庭の大きな特徴であり、その造形は一般的な庭の手引き書にはない独特の形態を持ち、デザイン的にも非常に優れているとされる。しかしながらその機能は実用的なものなのか、観賞用のものなのか、両用なのか賛否が分かれるところである。まず日本庭園における「飛び石」はどのような起源で、庭にとってどのような意味があるのか、改めて確認してみたい。

飛び石は、室町時代から安土時代にいたる過渡期に使われたものとされる。茶道を大成した千利休の桃山時代には「南方録」（利休による茶道の秘伝書）にもかなり用いられたものと著されている。しっとりとした市中の山居を表現した露地（草

庵式茶庭)の道筋が湿りがちであり、特に雨雪時に不便を感じることから、実用と景趣をかねて用いられたとされる。露地から発祥した飛び石は、歩く実用から書院庭園(座敷から観賞する庭)の景物(庭の景趣を構成する地物)のひとつとして用いられることともなってきた。千利休の頃は「わたり(実用)六分で景(デザイン)四分」とされたのに対し、その後古田織部、小堀遠州の頃には「わたり四分に景六分」されるようになった。一般的には、露地の移動経路の他に、足下を意識させることで庭草を観賞させたり、回遊式庭園では心地よいリズム感のある歩行をさせたりする等の機能を持つとされる。大きさは径30~40cm、地面からの高さは3~6cm、歩幅は45~50cm、左右の足間隔は15cm程度が標準とされる。その配置は直線的な配列ではなく、次図のように3~5石ごとに湾曲させて打っていくことが作法とされる。主に天端の平らな自然石を用いることが多いが、石臼等の廃物利用や歩きやすさを重視して切石や敷石を用いることもある。

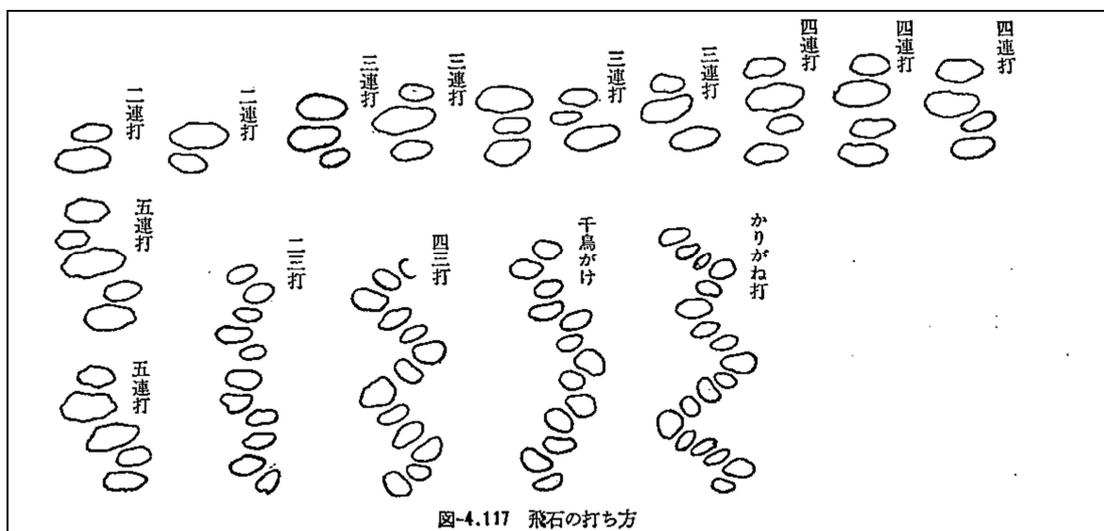


図-4.117 飛び石の打ち方

造園ハンドブックより

3. 露地(茶庭)における飛び石の考え方

前述の通り、飛び石は茶庭とともに発生したものであり、入口の門から露地と呼ばれる閉鎖的な空間の中を茶室まで誘導していく実用的な機能を持った装置であった。露地は茶道を前提とした空間であり、「飛び石の不連続の連続性は一步一步の足の運びに心を注がせ、それによって、おのずから伝う人の緊張感が高められていく。」

(「図説茶庭のしくみ」尾崎博正著)とされ、周辺の景色に客の目が奪われることを良しとしない「伝いの庭」とされている。とはいえ、露地は、歩行による連続的な視点の移動を空間計画の基本に置いた初めての庭園様式とされ、視覚の面でも様々な手法を持っているようである。

京都大学の岡崎甚幸らは日本建築学会論文集で「茶室露地における飛び石歩行の際の注視行動」で露地の飛び石を歩行する際の視線(注視行動)についての研究を発表している。この論文では露地の飛び石は茶道の作法上決められた歩き方があり、その歩き方(飛び石歩行)を行う際に、下記のような注視行動が認められるということである。

- ・ 露地内の飛石のうち、小さいものは片足を乗せ、大きな石（役石）は両足を載せて立ち止まらせることを意図している。
- ・ 飛石歩行では、3～4個先の飛石を注視する傾向があり、中門や茶室への注視は少ない。
- ・ 飛石歩行では、正面に添景物（灯籠、つくばい等）を見る傾向があり、これは飛石による視線の誘導という作庭の意図によるものである。
- ・ 飛石歩行では、植栽への注視は少ない。これは植栽によって心を乱さないという露地の本質に整合している。
- ・ 大きな石（役石）では立ち止まらせて、中門、灯籠、茶室（扁額）等の周辺環境への注視を促す。

このように露地では、通常の飛石は移動を重視し、決められた役石で立ち止まらせて、対象物を見せる手法をとっている。



露地の飛石例（観月庵（普門院：松江市））



露地の飛石例（出雲文化伝承館：独楽庵）

4. 回遊式庭園における飛び石の考え方

江戸初期頃になると、露地特有の歩行による連続的な視点の移動がさらに進化し、待合から茶室、茶室から待合へ訪れ歩く「回遊性」を持つ庭園様式が現れた。回遊式庭園の始まりである。回遊式庭園は、露地のように移動のための空間だけではなく、視点の移動により様々な景色の展開（シークエンス景観）を觀賞させる仕掛けをもつ庭である。造園家の進士五十八氏は、造園雑誌研究論文「日本庭園の特質に関する研究」で空間意識を変化させるための7つの要素（仕掛け）を述べている。①空間の広狭、②空間の高度の変化、③園路の分岐、④園路の屈曲、⑤路面（飛石や舗装材）の変化、⑥空間の明暗、⑦対象物（池や樹木、滝等）であり、これらは一定の周期（歩行リズム）で変化させており、同論文の桂離宮の調査では、この周期は平均歩幅 $0.54\text{m} \times 12 \text{歩} = 6.5\text{m}$ 程度としている。この中で飛石は足元を注意して進む路面の要素に位置づけていると考えられる。回遊式庭園においても通常の小さな飛石の視点は足元であり、何かを見せる場合は立ち止まる場所として役石（大きな飛石）を設けているようだ。

<回遊式庭園の景観の展開の事例>

空間の広狭（狭い景観：由志園）



空間の広狭（橋からの開放的景観：由志園）



高度の変化（築山からの俯瞰の景観：栗林公園）



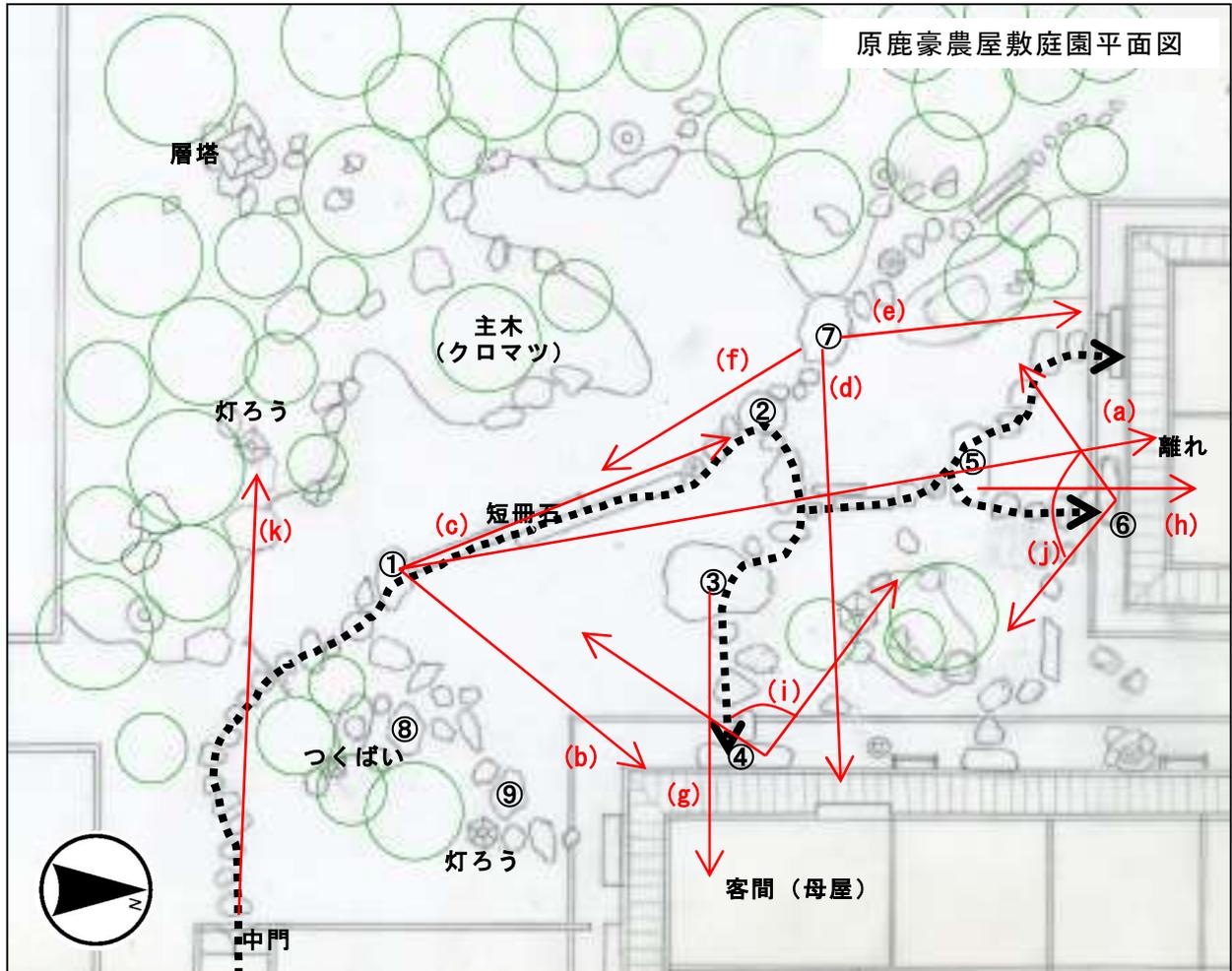
路面（飛石の景観：後樂園）



5. 出雲流庭園の飛び石の考え方（原鹿庭園をケーススタディとする）

出雲流庭園を回遊式庭園としてとらえるのはやや無理があると思われる。移動距離も短く、前述のような空間意識を変化させるための仕掛けにも乏しい。それでは露地空間として考えるのはどうか。庭は開放的な空間で全景を一望できる。市中の山居を模して閉鎖的で精神を集中させていくような空間でもなさそうである。ただし飛石は大小様々であり、役石と思われるものも見られる。露地や回遊式庭園のように何かを見せる仕掛けがあるのではないか。典型的な出雲流庭園とされる原鹿豪農屋敷庭園（出雲市）をケーススタディとして考察を行った。

出雲流庭園の庭内を歩く場合の基本的な歩行ルートは敷地南西部の中門→母屋の客間であり、北側に離れや奥座敷がある場合はそちらにも向かっている。原鹿豪農屋敷の庭園、出雲文化伝承館の豪農屋敷の庭園も同様なルートである。次図は原鹿庭園主要動線となる飛石と役石（立ち止まることを目的とすると思われる大きな飛石）と視線の方向を表したものである。（※番号は役石、英小文字は視線）

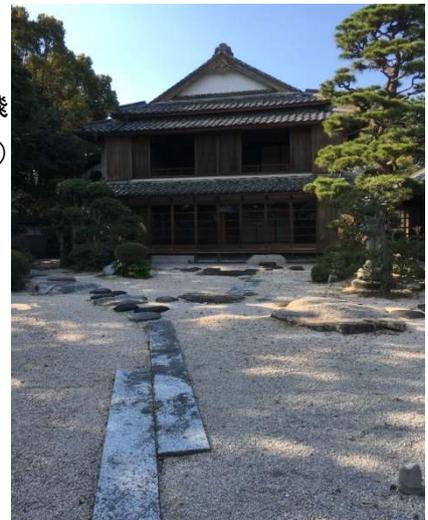


役石①は中門を入ってから比較的閉鎖的な空間から庭を見渡せる開放的な空間に移る最初の役石である。ここからは正面の大きな短冊石が視線を誘導した方向に離れの建物の妻側が右手のクロマツ越しによく見える(a)。露地でよく使われる額見の石(茶室の妻に掛けられた扁額を立ち止まって眺める役石)のように建物が最も立派に見える位置から見せているのではないだろうか。また右手には母屋の瓦葺きの屋根の棟の様子がよく見える(b)。左手には主木のクロマツや南西部の築山や層塔も目に入るが、注目すべきは座敷からは見えない進行方向の角度から飛石や短冊石の線形を見ることができる点である(c)。主な視対象物は「建物」と「飛石」と考えられる。

役石①：母屋の屋根の眺め (b)



役石①：
離れと (a) 飛石の眺め (c)



役石②(⑦)からは母屋が手前のクロマツと灯ろう越しに見え(d)、正面には離れの妻の破風の様子がよく見える(e)。振り返ると主木のクロマツとともに①と同様に歩いてきた飛石の線形を進行方向に見ることができる(f)。これは役石⑦にもいえることで、むしろ⑦からの方が飛石を全体的に眺めることができる。

役石⑦：クロマツと母屋の眺め (d) 役石⑦：離れの破風の眺め (e) 役石⑦：飛石の眺め (f)



役石③は出雲流庭園独特の「お駕籠石」、「駕籠置き石」と呼ばれる庭の中でも最も大きな飛石で、客間の正面に置く。かつて本陣の庭では殿様が駕籠を降りたことに由来しているといわれる、ここからは庭全体を見渡すことができるが、主木や灯ろうといった対象物までの距離がやや短く、観賞よりむしろ庭を体感する感じとなる。一方建物の部屋の奥まで確認でき、縁側に上がるこの庭特有の立派な沓脱石④、⑥も間近に見ることができる(g)。役石⑤も同じような性格を持つ(h)。

役石③：母屋の座敷と沓脱ぎ石の眺め (g)



役石⑤：離れの座敷と沓脱ぎ石の眺め (h)



④、⑥は庭から建物に上がる一段高い石(沓脱石)であり、どちらも振り返ると庭の全景を観賞する最も優れた視点場であると思われる。これは縁側に起立した時の視点からの眺めに近い(i)(j)。ここからは座敷に座って観賞する時には見えない出雲流庭園の主役である飛石の造形を高い視点から存分に楽しむことができる。

役石④からの眺め(i)



役石⑥からの眺め(j)



役石⑧、⑨については、視点場ではなく灯ろう、つくばいに向かって立ち止まるための実用的な飛石である。



また入口となる中門からの飛石の線形は正面の灯ろうへ視線を誘導する露地特有の技法を取り込んでいると思われる(k)。中門のある庭園は必ずといってよいほどこのような技法が使われている(額縁手法)。

さらに大きな短冊石は庭を造形する要素であるとともに奥の座敷へ視線を誘導する機能を持つとも思われる。

6. 出雲流庭園を回遊する楽しみ方

このように考えてくると、出雲流庭園の飛石は単なる移動装置や建物からの添景物ではなく、歩行に伴う視点場としての機能を持っていると推測される。そこからは灯ろうやつくばい、庭木、すぐれた飛石の造形に加え、風格のある出雲屋敷の建物の佇まいをも観賞することができる。この庭は建物からの眺めに加え、庭からの眺めも意識した構造になっているのではないだろうか。このような庭園構造は、江戸時代末期に本陣の庭として藩主を迎入れていた際に御成門から客殿までの短い移動の中でも庭や屋敷をアピールする工夫から生まれたものかも知れない。殿様はまずは飛石を歩きながら庭や建物を眺め、座敷に上がり違う角度から庭の表情を楽しんだのかも知れない。中門から客間への飛石の動線は出雲流庭園の必須条件であるといえる。このような動線はもともと書院式茶庭の内露地から来ているものであり、広い意味で書院式茶庭の進化形が出雲流庭園であると言ってもよいのではないだろうか。

また出雲流庭園の飛石の歩幅は「60 cm～70 cmであり狭い」と「出雲流庭園 歴史と造形」(昭和50年)とされているが、本当にそうであろうか。各種書籍では露地庭の歩幅は40 cm～45 cm(造園ハンドブック他)とされている。前述の進士五十八氏の前述論文の調査でも露地庭の歩幅は43 cmとされ、代表的な回遊式庭園の桂

離宮の平均歩幅は 54 cm、通常の公園の園路の歩幅（神宮内苑）は 65 cmとされている。筆者調査では、県内の露地庭の独楽庵（出雲文化伝承館内）は外、中露地が 45 cm、内露地が 40 cm、同じく露地庭の観月庵（松江市普門院内）では 40 cm～50 cmであった。また回遊式庭園の由志園（八束町）は 50 cm～55 cmであった。このように比較した場合、出雲流庭園の飛石の歩幅はむしろ広いということが分かる。明らかに露地庭よりも広く、茶道に使われるための庭ではないことが分かる。また一般的な回遊式庭園と比べても 10 cm程度広く、庭を眺めながらゆっくりと歩を進めるような庭とも異なる。（一般的に歩幅が広いと歩行速度も速いとされる）なぜ出雲流庭園の歩幅は広いのか。考えられるのは全体的に飛石の形状が大きいということである。今後詳細な測定が必要となるが、概して出雲流庭園の飛石は大小様々な大きさのものを使い、露地庭のように径 30 cm～40 cmの同形状もの（役石以外の飛石）をそろえていく形態とは異なる（下写真：独楽庵、観月庵の飛石参照）。特に役石（踏み分け石等）は極端に大きく、駕籠置き石等は径 2.0m～3.0m、短冊石も 4mを超えるものもある。飛石を施工する場合はまず大きな役石を据え、それを繋ぐように通常の石を並べていくのが一般的とされる。大きな石を置いた後のバランスを取るために全体的に大きな飛石を採用したのかもしれない。結果的に比較的単調になりがちな平面式の枯山水の庭に迫力ある独特な飛石の造形が生まれたのではないか。こう考えるとやはり出雲流庭園の飛石は「わたり四分に景六分」のデザイン重視であるようである。

独楽庵茶室付近の飛石



観月庵（普門院：松江市）の飛石



このように飛石は出雲流庭園の重要な景観要素であるとともに、庭の景物や建物の設え、加えて飛石自体の造形を觀賞するための視点場であると思われる。造園家の重森三玲は「書院式庭園は平面的で立体感がないのに対して、回遊式は4方正面で奥行きと厚みがある。」（日本庭園史大系 24巻）と言っているように、建物からの眺めのみならず、中門から客間まで飛石からの景観に触れることは、出雲流庭園の魅力のさらなる理解につながるとと思われる。ぜひ庭に降りて庭を楽しみたいものである。

<参考文献>

- ・造園ハンドブック（日本造園学会）
- ・「出雲流庭園 歴史と造形」（昭和 50 年）
- ・「図説茶庭のしくみ」（尾崎博正）
- ・「日本庭園史大系」（重森三玲他）
- ・日本建築学会論文集「茶室露地における飛石歩行の際の注視行動」（岡崎甚幸他）
- ・造園雑誌研究論文「日本庭園の特質に関する研究」（進士五十八）